



▲『河ぞひ』大正14年7月号



▲戦後に発行された同人諸誌

『文芸春秋』で紹介されたり、高見順の『昭和文学盛衰史』の中で、主要地方文芸誌164誌にあげられたりしています。

また『河ぞひ』に結集した同人は、終刊後も新民謡運動や最初の古河文化協会の設立(のち文化連盟に発展拡大)でも中核を担うなど、古河の文化活動に大きく貢献しました。

ちなみに、古河町長を務め、文学に造詣が深く、歴史小説家・永井路子氏に大きな影響を与えた叔父の永井三郎も『河ぞひ』のよき理解者であり、文化協会では発起人・理事として名をつらねています。

戦後の文芸興隆

戦後まもない昭和20年11月には、いち早く『スベニール』という同人誌活動がはじまっています。永井路子氏も第2号にロマン・ロランの作品論を寄稿、他の同人たちも意欲的に創作を続けますが、大変残念なことに



▲『スベニール』第2号～第6号

『スベニール』はGHQの検閲にかかり、第6号で廃刊のやむなきにいたりしました。

しかし、その後も『途上』『文化』『文学運動』などの同人誌が相次いで発刊され、さながら「同人誌の時代」ともいえるべき文芸興隆期を迎えます。

昭和27年に創刊された短歌誌『まぐら^{まぐら}良我^が』は、その後『詩群』と名を改め、短歌・俳句・現代詩を網羅した総合詩文学誌として、最盛期には100人以上の同人を擁し、詩集・歌集・句集などの『詩群叢書^{しぐんそうしよ}』を刊行するほどの活動をみせました。

県下唯一の「文学館」があるまち

こうした先人たちが育んできた濃密な文学的風土を背景に、平成10年に古河文学館は開館しました。詩歌・小説・児童文学等、さまざまなジャンルの文学をカバーする「文学館」としては、今のところ茨城県下で唯一の存在です。

この貴重な文学的風土を大切に継承していかなければ、できれば一寸発展させられればなどと、大それたことを夢想しつつ、心を新たにする今日この頃なのです。

古河文学館学芸員 秋澤正之

※当館では『河ぞひ』など、古河で発刊されていた同人誌を収集しています。お持ちの人は、ぜひご一報ください。